



桃林寺本堂の実測図面と今後の歴史的建造物への取り組み

平良 啓

株式会社 国建 取締役
芸術工学博士
TAIRA Hiromu

1. はじめに

「ウチナーヤーセーク」(大工)の親泊次郎さんが2年半の歳月をかけて、八重山桃林寺本堂の詳細な実測図面と原寸図を作製している。親泊氏は5回ほど石垣島に渡り、その都度2、3日かけて本堂の実測調査を行ったのである。具体的な調査内容は、建物の間取りや各部位の高さ、建築部材の寸法、さらに屋根に登っての入母屋破風の形状・寸法、鬼瓦の形状の実測などである。これらの成果は建物の平面図、立面図、断面図、床伏図、小屋伏図、天井伏図、屋根伏図として取りまとめられている。虹梁こうりょうに施された唐草文様や屋根頂部にある鬼瓦などは、カーボン紙を当てて忠実に形状を写し取ったとのことである。図面はA1サイズ(約84cm×約59cm)のマイラー紙に製図ペンで描いている。さらに、大がかりな軒先の原寸図も作製している。



写真-1 原寸図を前に語り合う親泊次郎氏(右)と筆者

そもそも調査の動機は「自分は八重山出身で、子供の時、隣の権現堂でよく遊んだ。神殿の象木鼻の彫刻に興味があり、30年ほど前にスケッチで描いたことがある。今のうちに本堂の現状を自分で調査して図面を作製し、その記録を将来の改修工事に役立ててほしい。若い人たちに沖縄の伝統的建築技術を引き継ぎたい」ということであった。

ちなみに親泊氏は昭和8年の生まれで、沖縄の現役大工として、多くの木造建築物の工事に関わってこられた。最近の仕事は首里城右掖門の復元工事、真壁ちな一家の補修工事などである。なお、自宅を3階建ての木造で建てたことは既にマスコミなどで紹介されている。本稿では、桃林寺の歴史的経緯を述べて、親泊氏作製の図面に基づいて本堂の建築的特徴を紹介する。そして、沖縄の歴史的建造物を取り巻く現状と課題を取り上げ、これからの復元・修理・記録のあり方などについて考えてみたい。

2. 桃林寺について

文献・資料によると、桃林寺は八重山最初の寺院として1614年に創建された。当初は真言宗であったが禅宗に改宗され、現在は臨済宗妙心寺派となっている。1694年に茅葺屋根が瓦葺に改められた。1736年から翌年にかけて境内の拡張が行われ、仏殿を建立し、山門仁王像が造立された。しかし、1771年の明和の大津波で被害を受けて翌年に再建されている。1881年(明治14)に改築され、1933(昭和8)年に台風被害を受けて山門や仁王像などに被害がでたが、1937(昭和12)年までに修復された。1945(昭和20)年に戦火にあうが、1947(昭和22)年に修復された。沖縄県の重要文化財に指定されて山門に安置されている仁王像は1737年に製作された沖縄最古の木彫像で、2010年に開催された九州国立博物館での特別展で出展された。

親泊氏が調査した本堂は、日本復帰前の1968(昭和43)年に八重山出身の棟梁新垣良一氏らが建てた木造建築物である。材料は主にタイワンヒノキで、当時台湾から那覇に輸送し、そして八重山に運ばれたとのことである。平成17年、本堂の瓦葺き替え工事が竣工した。



写真一 2 桃林寺本堂、1990年頃、筆者撮影

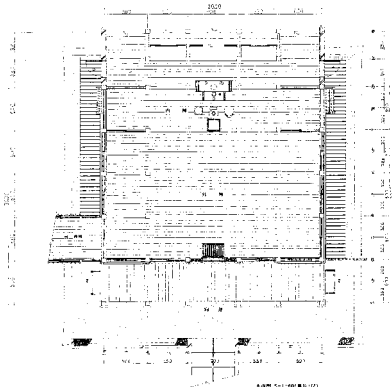
3. 親泊氏の実測調査

親泊氏が調査して作製した本堂の図面や氏のコメント、現況写真から本堂の建築的特徴について紹介しよう。まず、構造形式は、木造平屋建て・入母屋造・赤瓦本瓦葺・桁行5間・梁間4間に1間の向拝付である。北側は鉄筋コンクリート造の建物とつながっている。

柱筋に6寸(182mm)の角柱を配置し、外陣のみ4本の柱は設けずに3間分の柱間として広い空間を確保している。内部はすべて板敷きで、土間は設けていない。

桁行と梁間方向の長さがそれぞれ30尺(9,090mm)で、正方形平面となっており、正面に板張りで吹放しの向拝、室内は外陣と内陣で構成されている。これらの平面構成は日本建築における仏寺建築の様式を基本的に踏襲している。親泊氏は、向拝の板張りは、正面床下に階段が見られることから、当初はなかったのではないかと想定している。

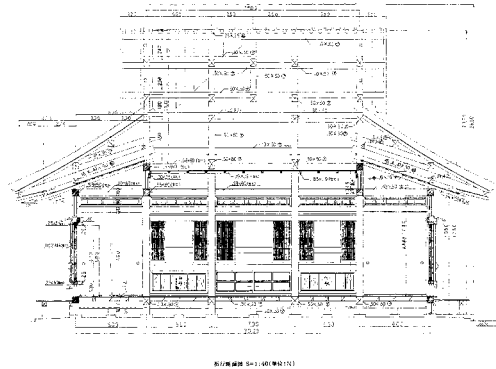
柱間寸法は6尺(1,818mm)であるが、中央の柱間を7尺(2,121mm)として他よりも広くしている。ただし、その左右の柱間を5.5尺(1,667mm)



図一 1 平面図、作図親泊次郎

としているのは、正方形平面とするために調整したのであろうか。

外周柱上部には舟肘木を差している。外壁は縦板張目板打で、沖縄の木造建築にみられる形式である。天井は外陣の中央部分は格天井で、その左右と内陣、向拝部分は化粧垂木をそのまま見せている。



図一 2 桁行断面図、作図親泊次郎

屋根の棟積は、台熨斗瓦を二重三重に並べて漆喰で巻き、さらには大棟先端には鳥衾を置いて重厚さを出している。その雰囲気は金武観音寺の屋根にも共通する。

最も顕著な構造的特徴は桔木の採用であろう。桔木とは軒先の中に太い木材を入れて屋根の荷重を支え、軒先の垂れ下がりを防ぐもので、平安時代に創案されたと言われ、日本建築で最も重要な構造形式である。この桔木の採用によって軒の出が長い優雅な日本建築が発達していった。ただし、この桔木はいわゆる「琉球建築」にはほとんど見られない。先人達は、台風常襲地域のこの地では軒の出を短くし、太い垂木で直接屋根を支えた方がよいと考えたのか、あるいはそこまで技術が発達しなかったのかを結論づけるには今後の研究を待つことになる。小屋伏図と断面図によると、桔木は放射状に配置され、軒の出は4尺7寸4分(1,436mm)まで伸ばしている。さらに、地垂木と飛檐垂木は屋根荷重からほとんど解放されることから、細くて軽やかな軒先が実現しているのである。「琉球建築」ではめずらしいプロポーシオンである。

正面左右に花頭窓を配置している。この形式の窓は戦前まで存在していた円覚寺仏殿や崇元寺本殿などにみられるもので、禅宗様建築の特

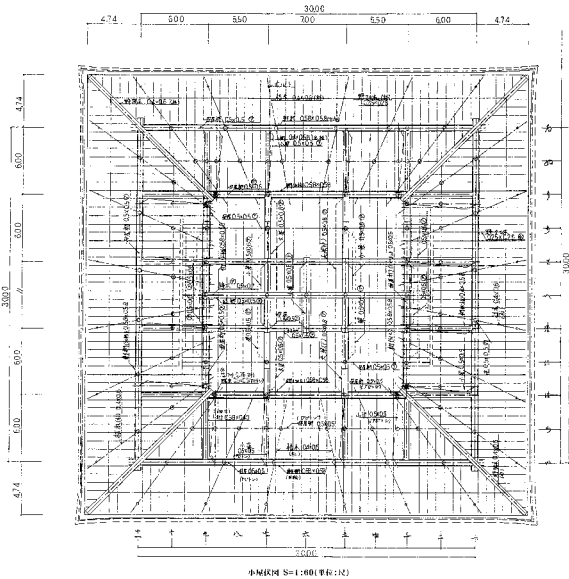


図-3 小屋伏図、作図親泊次郎

徴の一つである。また、正面の中備として板なかぞなえを3か所に設けている。慕股いたかえるまたは両足を踏ん張った慕(蛙)に似ていることからそのような呼び名がある。時代が下ると構造材としての役割が薄くなり、華やかに装飾化する。

向拝上部の繋ぎ貫先端にはそれぞれ線型の木鼻きばなが付き、その向拝と母屋を繋ぐ虹梁には唐草文様の彫刻が施され、華やかさを醸し出している。

以上、本堂の主な建築的特徴を述べたが、日本建築の様式を基本として琉球建築の要素も取り入れてうまくバランス良くまとめていること



写真-3 慕股

が分かる。昭和40年代に、伝統的わざの技をいかになく発揮した職人がいたことに敬意を表したい。そして、親泊氏が精力的に調査してまとめ上げた図面などによってそのことが理解できたわけであり、氏の労を多としたい。あらためて伝統的木造建築物の奥深さと素晴らしさが実感できる。

4. 沖縄の歴史的建築物を取り巻く現状

私は、古民家調査に関わる機会を得て、建物と屋敷の基礎的調査を行い、さらに、取り壊しの運命にある古民家を急遽調査した経験がある。そこで感じたのは「沖縄の古民家が危機に瀕している」ということであった。何といってもシロアリと腐朽菌による被害が著しい。それに屋根の破損部分から室内に雨漏れを起こして

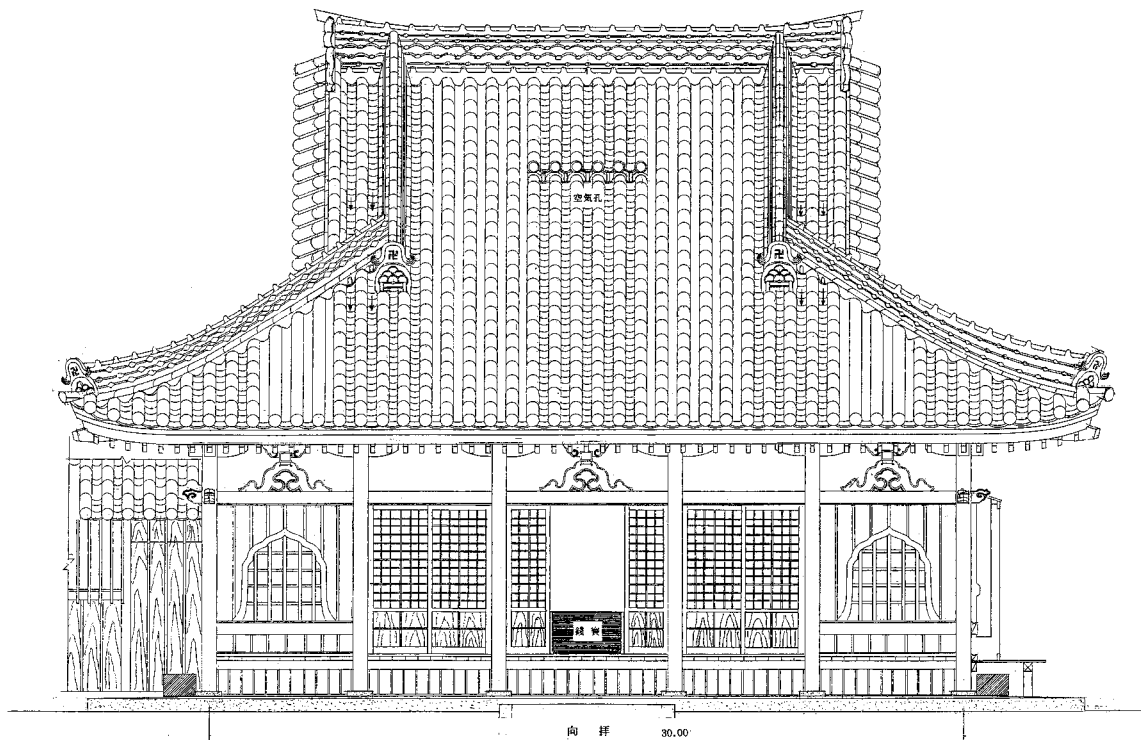


図-4 南立面図、作図親泊次郎

南立面図 S=1:40(単位:尺)

いる建物も多く見られる。これらの「症状」は主に空き屋敷の建物に多く、やはり建物は人が住んでこそ生きてくるものであるということを痛感する。私が気になるのは、ほとんど個人の所有物である古民家の行方である。築50年以上経つと「登録有形文化財」の対象になるとはいえ、現代人の生活スタイルとの齟齬や建物の維持管理の問題などから古民家は敬遠される場合がある。

さらに、伝統的建築技術を継承していくという点でも気になる点である。つまり、沖縄県内で伝統的建築技術を組織的に習得する機会が少ないことである。本土では講習会が頻繁に開かれ、大工塾なる組織の活動も盛んである。大工にあこがれる若い人も増えていると聞く。数百年以上も経っている建造物も比較的多く残っており、まさに目の前に教材があることで、伝統的建築技術の上達も早いことだろう。

一方、去る沖縄戦で貴重な歴史的建造物のほとんどが破壊・焼失してしまった沖縄では、歴史的建造物に触れてその重みを実感できる機会が少ない。加えて、鉄筋コンクリート造の住宅が主流となり、伝統的木造住宅に住む機会は少ない。そのことで、連綿と続いてきた住まうことの理念や基本的考え方、習慣、作法などが変化してきていると思われる。県内には木造建築物を専門に設計する組織や技術者は少なく、ましてや伝統的建築物の復元設計、保存補修工事に関わっている設計士は少ないのが現状である。

さらに、文化財行政の予算が厳しいことで各市町村に存在する歴史的建造物の維持・管理が満足にできない状況がみられる。特に木造建築物は油断するとシロアリ被害が進行するので日頃の点検・修理が必須である。

5. これからの沖縄における歴史的建造物の保存修理・記録のあり方

沖縄の歴史的建造物に関して明るい話題もいくつかある。現在、沖縄でも民間ベースで古民家再生のネットワーク作りが進んでいる。これは、古民家を活用したいと考えている人に古民家の情報を提供して、その利活用の可能性を見つけようというもので、説明会なども行われている。活動はスタートしたばかりであるが、こ

のような動きは注目したい。

また、取り壊されてしまった古民家の古材を再利用するための活動も行われている。イヌマキ(チャーギ)やモッコク(イーク)などの貴重な柱や梁を、新築や改修する建物の室内にインテリアなどの素材として再利用するのである。「古さ」と「新しさ」がコラボレーションする心地よい空間が実現する。

私も所属している(社)沖縄県建築士会では、平成23年度の文化庁事業として、沖縄県内の文化財建造物修理に関わる技術を学び継承する目的で、建築の伝統技能者による講習会や実習、文化財建造物の保存修理現場の見学会などを行う業務がスタートしている。建築士や学生を中心として、伝統的建築技術に関心を持ち、先人達が築き上げた貴重な技術の継承・発展を認識してもらう機会になることが期待される。

また、「高校生ものづくりコンテスト大会」の木材加工部門にも県内の工業高校生がチャレンジしている。頼もしいかぎりである。

沖縄県内では、平成4年の首里城復元以降も、木造建築物の復元や保存修理工事の機会が散発的ながらみられるようになってきた。そのことで、沖縄本島では若い大工や石工、瓦職人などは育ってきつつあると感じている。

沖縄在住の漆芸職人が首里城内の建物の塗装・彩色工事に継続して従事している。これまで建物の本格的な塗装・彩色工事は沖縄県内では対応が難しかったが、これを機会に沖縄在住の職人で伝統的な塗装・彩色工事は対応できることが示された。

これまでも、歴史的建造物への取り組みについて議論されてきた。まず、現存する歴史的建造物の実態調査を組織的に進める必要がある。さらに、親泊氏が実践したように、可能な範囲で民間の有志で調査する方法もある。

歴史的建造物に関する課題は山積しているが、行政や民間問わず、その改善に向けた取り組みを引き続き推進することで、希望が見出せると考えたい。沖縄の建築文化が美術・工芸・芸能などと共鳴することで、「沖縄の伝統文化のさらなる隆盛」を期待したい。